

「子ども目線」

助任司祭 林 正人

この夏、高円寺の教会学校をはじめ、ミッションスクールやスカウト等の練成会に参加させていただき、子どもたちと楽しい時を過ごすことができました。しかし休暇ということではなく、司祭としての参加ですから、お話やミサでの説教は当然巡ってくるわけで、その準備は、結構気合いを入れてしました。相手が子どもであっても、司祭として公に話す場合、決して気は抜けません。話に対する反応は、むしろ子どもたちの方がダイレクトです。司祭に対する過剰な尊敬がない分(?)、彼等は「分かる」「分からない」をハッキリ言葉と態度で表明します。ある意味、一番厳しい批評家と言えるでしょう。

叙階以来、ミサでの説教をはじめ、様々な場面で「話す」役割を与えられてきましたが、話を準備する時、いつも心がけているのは「子どもにも分かるような話をする」ということです。つまり、専門用語の羅列や難解な書物の引用等を極力避け、日常の言葉、日常の出来事を基にして話すよう努めています(実際にできているかはともかく)。難しい書物の言葉等を引用して構築すれば、美しく、まとまった話ではありますが、多くの場合そのような話は、聞き手は翌日になれば忘れてしまうでしょう。その話が聞き手にとっても、また語り手にとっても、自分の経験、生活に根ざしたものではないからです。

イエス様は、いつも聞き手の生活に根ざした話をされました。子どもたちに向って話す時は、きっと子どもたちにも分かる話をされたことでしょう。常に聞いている人の目線で話をされる、だからこそイエス様の許には多くの人が集まったのです。

子どもへの話や説教は、司祭として人前で話す時の基本姿勢を、いつも私に振り返らせてくれます。ですから、主日のミサ、特に子どもたちも参加する九時半のミサの説教は、私の場合、どうしても子どもに向かって語りかけることが多くなります。大人たちにとっては不満も残るかも知れませんが、ご容赦いただきたいと思います。皆さんも、時には子どもの目線まで降りてみて下さい。もしかしたら、思わぬ新しい発見もあるかも知れません。